

# 世界に発信する アーティストたち

No.9

## 綿引 展子

Nobuko WATABIKI

和紙にオイルパステルで独特なマチエール  
の作品を描く綿引展子。  
ドイツでは新たに布を使った作品へとその  
表現は幅を広げた。



文化庁在外研修生としてドイツ・ハンブルグに2008年に制作拠点を移して以来、現在もハンブルグで制作活動を続けている綿引展子。和紙にオイルパステルで簡略化された独特の人物を描く綿引の作品は、ドイツで新たな展開を見せている。これまでのオイルパステルの作品に加え、古着の布を使ったキャンバス作品が誕生した。これまでのモチーフは変わっていないが、素材の変化が作品の表情に微妙なニュアンスを与えている。

——現在、ドイツのハンブルグで活動されていますが、文化庁在外研修生で2008年に1年の予定で行ったままハンブルグが制作拠点となったようですね。  
綿引 1年はとても短いですね。ようやく人の顔が分かってきたという時に帰るのが惜しくて、もう少し何かができるのじゃないかと欲がでてきました。

——それで一度帰国して、またハンブルグでということになったのですか。綿引さんにとって海外で制作するメリットはなんですか。  
綿引 自分としては誰も私のことを知らない環境が新鮮で面白かったですね。ここでもう一回

頑張れるかなと、やってみたい気持ちになりました。ドイツに行ったら天涯孤独みたいなものですが、それがもう一回自分のことを考え直す良い機会になりました。集中して考えられるという環境があつて、制作の間も十分にとることが出来ます。

——作品も変わりましたか。  
綿引 そうですね、ドイツに来て、せっかくだから今までと同じ作品を作るんじゃなくて、なんか新しいことに挑戦してみようと考えたんです。ヨーロッパはキャンバスの文化だから、それを使ってやってみようかなというふうに変えてみました。

縫いつける作品となった。

綿引 キャンバスの仕事に、筆を使って油絵をやってみたくて思っていたんですけど、筆の仕事（油彩）を納得のいくまでにするには時間がかかると思い、それまでの間キャンバスに触れている仕事として布の仕事を始めました。油彩の仕事を将来的には納得のいく物にしていこうと思つています。布の仕事は絵の中の色の部分にドイツの布を使うということなんです。これがドイツの色だというのが作品に上手く使いたいと思つてドイツで手に入れた古着を使うというのを考えたんです。古着といつても古いものじゃなくて、Tシャツはものすごい色の種類があつて、色鉛筆のようにTシャツが並んでいるわけです。これは絵具の代わりに使えるんじゃないかなと思つて、そこからドイツの色として使いたしているんです。でも、マテリアルとして使っているだけで、作品の内容はそんなに変わっていないんですよ。人物の顔があつて、手が

## 美術は何かをできる必要なもの という強い思いがある



綿引展子 〈ひとつづつ夜が明けた〉  
パネル 和紙にオイルパステル 60.0 × 40.0

あるという単純化した形で人物を見せていくという形は。でも、縫つてばかりいると、今度は絵を描きたくないので、和紙の仕事と両方やりながら、やっています。

——オイルパステルと和紙もドイツにもついていたのですか。  
綿引 最初の年に、新しいもの

だけをやるんだということではなく、自分はいつも和紙で描いているからそんなに痩せ我慢し

ないで、自分が日常でやる材料を持っていくと思つて、和紙とオイルパステルは日本から持つていきました。それをドイツの周りの人達に見せると、ものすごく興味をもつてくれて、まず和紙に興味を持ちますよね。ハンブルグには民族博物館があります。その初代館長が日本美術の大コレクターで、膨大なコレクションがあるんですよ。そういう展示を見ているので、

わりと皆さんは日本美術についてご存じなんです。ただ、私がやっている和紙にオイルパステルで描くというのは新鮮だったみたいですね。オイルパステルで描くと和紙が少し毛羽立ったみたいになるんですよ。ストロークによって出てくるんですが、その感じを日本でもみなさん喜んでくれるんですけど、ヨーロッパの人たちも、これは何だみたい目輝かせてくれ



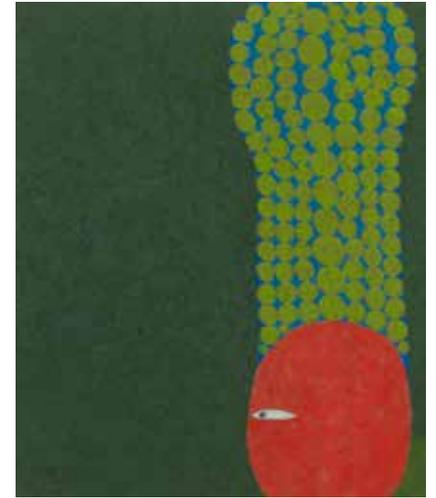
綿引展子 (かさえる地面とかさえる空と)  
キャンバス地に布 水彩 166.5 x 165.5

■ 4月17日→4月23日  
「手のなかのこころ 綿引展子 絵画展」  
小田急百貨店 新宿本店 10階=美術画廊

■ 5月15日→6月3日  
「綿引展子 作品展」  
軽井沢ニューアートミュージアム 1階ギャラリー

度で、制作しています。  
——ドイツに行くことによって  
技法的な新しい展開も出てきま  
したが、もの見方が変化した  
というようなことはありますか。  
綿引 ドイツに行った最初の頃  
は、ドイツ人と日本人の似てい  
る点、違うところとかいうか、そ  
ういうところばかり気になって  
いました。ちよつと長くなる  
と、ドイツ人日本人という文化  
の違いというものもあるけど、人  
間という共通があつて、もちろ  
ん笑わない人はいないし、泣か  
ない人もいない訳ですよ。な  
んか、そういうもう少し俯瞰し

て見られるようになってきまし  
た。それでも、外国にいると自  
分が日本人だと日々いろいろなこ  
とで思うわけです。向こうも日  
本人だと見るわけです。私が個  
人であるよりも大きいメッセー  
ジなんですよ。歩いてみると、  
私個人というよりもアジア人が  
いると見られるわけです。そ  
れまでは私の私的な感情という  
のが大きな基軸だったんですけ  
ど、もつと大きく捉えて、アジ  
ア人であり日本人であり今は異  
邦人である私とか、少しずつ大  
きく見られるようになってきて  
います。私の私的情感が大きかつ



綿引展子 (なにをしてきた？ I)  
パネル 和紙にオイルパステル 墨 水彩 20F

品を描くのは、筆と違って大変  
ですよ。

ました。そしてオイルパステル  
は要するに日本の色ですよ。こ  
れで描いていると、あきらかに  
日本の色味だねえというような  
言い方をされて、面白がつてい  
る。私自身もドイツに居てオイ  
ルパステルで描いていると、改  
めて日本の色味のような気がし  
ましたね。それで、意識的に日  
本的にあつてみたり、ヨーロッパ  
的な組合せをやつてみたり、  
今まで使つたことがない色の組  
合せをやるといふ、そういう幅  
も自分の中で出てきました。

綿引 時間がかかりますね、た  
だ手で描いていく速度と自分が  
考えているのがわりと合うので、  
それ自体は速度的にはいいです  
ね。オイルパステルは考える速  
度と、描く速度が同じです。反  
対に縫う方は早いんです。で  
もよく出来たもので、早くでき  
るけど、よく見るとちよつと違  
たなあと思うと、縫っているだ  
けなので切ればいくらでもやり  
直しがきく。でも和紙はやり直  
しがきかないのでゆつくりの速

## 開館 40 周年記念企画

### 「アジアをつなぐ——境界を生きる女たち 1984-2012」 に選ばれた作家のひとりとして出品した綿引展子



小勝禮子学芸員

栃木県立美術館の開館40周年記念企画とし  
て開催された「アジアをつなぐ——境界を生  
きる女たち 1984-2012」展は、同  
館の小勝禮子学芸員によって企画された非常  
に今日的な社会状況を捉えた意義のある美術  
展となつていた。80年代から90年代にかけて  
アジア各国に浸透したフェミニズムの影響を  
受け、活発に表現する女性作家たちが登場し  
た。その作家たちの作品を「女性の身体」「女  
性と社会」「女性と歴史」「女性の技法、素材」「女  
性の生活」の5章に分け、各テーマごとに作  
品が展示された。パキスタン、インド、バン  
グラデシユ、ベトナム、中国、韓国など16ヶ国・  
地域の48作家約110点の作品が紹介された。  
こうした広い視野でフェミニズムについて美  
術からアプローチされた展覧会は今まで一度

も企画されていないのではないだろうか。

日本からは井上廣子、塩田千春、町田久美、そして綿引展子  
が出品している。

「綿引展子さんはすでに80年代に台頭した女性アーティストの  
一人として出てきましたが、その時に出てきた人で、その後も  
活動されてきた方は少ないですね。女性はどうしても結婚が  
あつたり出産があつたり、アーティストとしてモチベーション  
をもつてやり続けるのは難しい人が多いです。綿引さんは第5  
章の(女性の生活)、女性のアーティストとして独り立ちをして  
活動をしている作家として、そして、2000年代、現代の先  
端の女性アーティストの表現として選ばれました。とくに日本を  
離れてドイツで活動している綿引さんの場合は第2章の(デイ  
アスポラ)つまり自分の生まれた地を離れて表現活動を続けて  
いる、という項目にもあてはまりますね」

担当の小勝禮子学芸員は、作品の選択についてこのように話  
してくれた。展示作品はドイツで制作された布をつかったキャ  
ンバス作品「それとなく待ちのぞむ」も展示されていた。



綿引展子の作品展示



「アジアをつなぐ——境界を生きる女たち 1984-2012」  
展示風景

大部分が、そちらにシフトしていると思います。

——そういう変化は表現にも出ているのでしょうか。

綿引 自分の作品を俯瞰的に別の人の作品を観るようにはなかなか言えないんですけど、私をよく知ってくれている信頼できる友人から、見やすくなっている、今は、もっと離れて作品としてみられるようになってきたと言ってもらったので、自分が考えている私的なものからもっと離れていると思いました。そういう点で幾ばくかの成功はある



綿引展子 (手の高さに手を握え)  
パネル 和紙にオイルパステル 100.0×70.0

#### 略歴

1958年 東京都生まれ。  
2008年～ 文化庁在外研修生としてドイツ・ハンブルクに滞在。  
2011年 東日本大震災を受けプロジェクト「TEGAMI・Perspektiven japanischer Künstler」(TEGAMI・日本から来たアーティストのハガキ)をドイツにて立ち上げる。日本から250人以上の作家が参加。360点以上の作品が集まる。以降一年展をベルリン日独センターにて開催するなど継続的に活動。

#### <個展・出品>

1985年 「私の位置から最もすぐれた姿勢」ギャラリー繪(東京)  
1986年 「第6回試行する美術—国際小さな芸術展」山梨県立美術館/山梨  
1987年 The 4th Pusan Biennial」釜山市民ホール/韓国・プサン  
アーティストネットワーク エキスパンデッド1987」福岡県立美術館/福岡  
1991年 「風の造形展」すみだリバーサイドホールギャラリー/東京  
1994年 「現代の人間像—(わたし)という存在証明展」北海道近代美術館/札幌  
1997年 「VOCA」展 上野の森美術館(東京)  
「(私)美術のすすめ—何故(WATAKUSHI)は描かれるか—」板橋区立美術館(東京)  
1998年 「VOCA」展 上野の森美術館(東京)  
1999年 「メティテーション 真昼の瞑想」栃木県立美術館(栃木)  
「現代日本絵画の展望」展 東京ステーションギャラリー/東京  
2003年 「city\_net asia2003」ソウル市美術館(韓国)  
2005年 「愛と孤独、そして笑い」東京都現代美術館(東京)  
「さまざまな眼146」かわさきIBM市民文化ギャラリー/川崎  
2007年 「trauma-interrupted」CCP(マニラ・フィリピン)  
「BTAP5周年グループ展」BTAP, BTAP Annex-(中国・北京 stadtindiane in Jenischpark (ドイツ・ハンブルク)  
2009年 FRISE クンストラーハウスハンブルグ/ドイツ・ハンブルグ  
gAlerie! (企画 Galerie Der Zukunft) gymnasium Alle 内/ドイツ・ハンブルグ  
2010年 galleria kioskin (ヘルシンキ・フィンランド)  
「Velada Santa Lucia 2010」サンタルチア マラカイボ(プエノスアイリス)  
「イノセンス—いのちに向き合うアート」栃木県立美術館  
RuArts Gallery /ロシア・モスクワ  
2011年 「ひとのかたち、それぞれ」もうひとつの美術館(栃木)  
museo de arte contemporaneo FLORENCIO DE LA FUENTE (スペイン)  
2012年 「Domani」東京国立美術館(東京)  
2013年 「アジアをつなぐ—境界を生きる女たち 1984-2012」福岡アジア美術館・沖縄県立博物館・美術館・栃木県立美術館・三重県立美術館(巡回)  
ハンブルグ市庁舎 Hamburger Rathaus

るんじゃないかと思っています。

——ところで話は変わりますが、ドイツでは東日本大震災を受けた手紙のプロジェクトも行って

ドイツにいたら、津波の映像が毎日流れていたんです。私も驚いたまま帰ったので、ただ揺れただけですけど、帰ったあとに茫然としちゃったんですよ。いろんなドイツの人から聞かれて、新聞のインタビューも受けて。そこで私は、日本人を代表して話せるような内容じゃなくなってきたような気がしました。私は揺れてないドイツにいるわけで、だから温度差が出

てきたかと思ったんです。いま日本にいる方と安全なドイツにいる私と。そこで私にできることは何だと考えたんです。私にできる一番のことは、能力的には美術に長く関わってきたので、美術に関するものが私の能力の中で一番高い。だからこれを使って何かをしなくては行かない気が持ったんです。で、プロジェクトを作って、日本のアーティストの声を直接ドイツに届けることにしました。1ヶ月後には募集を始めて、本当に震災直後のアーティストの人たちが考えたり感じたりしていることを送っていただいて、それを展示してドイツの人たちに見せました。

——迅速な対応と企画ですね。  
綿引 その時は興味深い経験をしました。美術に何ができるかというようなことを聞かれるんです。社会を変えることができるのかとか。私は美術をずっとやってきて信じているんですけど、つまずき、震災のような時であって、美術は何かをできる

必要なものだという強い思いがあったんですよ。それにはいろんな批判があったし、別の考え方があるのは分かるけど、私はそれを信じているからこのプロジェクトをやって、日本人の声を届けます。

——貴重な仕事になりましたね。  
綿引 そのプロジェクトを通してすごく多くのドイツの人たちとも話ができて、いろんな考え方の違いがはつきり分かってきて、面白かったですね。ちょっと時間をとられてしまったけど。

——これから今年にはハンブルクの市庁舎の展覧会や、公園での立体作品の設置など、いろいろな予定があるそうですね。  
綿引 ドイツに行き始めたこのもうひとつに、ドイツ人の障害者の人と共同制作をやるというのがあってそれもやっていますが、もうすこしドイツで仕事をしたいこうと思っています。

——新しい立体作品も楽しみにしています。  
綿引 これは挑戦ですからね。

## 「阿・咩」に集合したアーティストたち



■「阿・咩」  
2月8日→3月31日  
軽井沢ニューアートミュージアム 1Fギャラリー

軽井沢ニューアートミュージアムで開催されている「阿・咩」展は、2月8日から大敷雅孝、有元利夫、澁澤脚、宮廻正明など18名の作家によるグループ展としてスタートした。そして3月2日の正午には、出品作家たちが集まった。東京藝術大学美術学部のデザイン専攻で、大敷雅孝の教えを受けた作家たちによってできた自発的な「阿・咩」の展覧会は、全員が同じ作家として対等な関係で展開してい

うという、開かれた運営を目指している。これは先輩も後輩もない、みんな同じ作家だという大敷雅孝の考え方からきている。現在の閉塞する美術状況も、先輩後輩というものに固執する硬直した社会関係にも一因があるという思いもあるようだ。みんな切磋琢磨していい作品を残していこうと立ち上がった「阿・咩」は、今後柔軟にいろいろな展覧会を行って行く予定だとい